

巻頭言（2012年10月号）

理事長 新谷友良

「騒音と聞こえ」

8月号の巻頭言でノルウェー政府の「音環境のユニバーサルデザイン」（ノルウェー国家施策 2009-2012）に少し触れましたが、最近騒音（雑音）と聞こえの問題に関心を持っています。

聞こえに障害を持つと、聞き取りできる最低の音の強さ「閾値」が上昇します（大きな音でないと聞こえない）が、生理的に不快に感じたり、痛みとして感じる音のレベルは変化しませんので、少し閾値を超えた大きな音を聞くとびっくりしたり、気持ちが悪くなったりします。聞こえに障害を持つと聞き取りできる音の強さの範囲が狭くなるのが原因の、いわゆる「リクルートメント（補充）現象」です。

ノルウェーの国際難聴者会議では、健聴者と難聴者に分けて騒音下での聞こえの障害の有無を確認した報告がありました。騒音レベル 60dB ではほとんどの難聴者は会話困難、健聴者でも 55%の人が会話困難ということでした。また、補聴器装用者では、静かな環境なら大丈夫という人が 45%ですが、ほとんどの方が騒音下では聞き取りが難しいと回答しています。一方報告は、指向性マイクを使うことで 6 dB 改善、補聴援助機器（磁気ループなど）の使用で 25dB 改善されるとしていました。

数学的には厳密ではありませんが、上の数値を簡単に考えれば、聴力レベルが 20dB 位であまり聴力に問題がない人でも、60dB の騒音下では 80dB 位の難聴状態になると理解でき、一方磁気ループを使用すれば、80dB 位の高度難聴者も雑音を排除して 20dB 位の軽度難聴状態に聞こえを改善する（語音弁別の問題は残りますが……）ことができるかと理解されます。

平成 21 年に独立行政法人産業技術総合研究所の研究者が「高齢者・障害者対応の聴覚情報環境の構築」をテーマに、①物理的に静かな製品や環境をつくる（物理的静かさ）、②音の機能に着目し、機能を発揮させるための環境を整える（情報伝達環境の最適化）、③ヒトにとっての「静けさ」とは何かを追求する（認知的静けさ）という報告を行っていることを最近知りました。海外だけではなく日本でも、音環境と聞こえの問題が以前から意識されていたことに安心をおぼえると同時に、「灯台もと暗し」の自分を恥じた次第です。